

# 魏志倭人伝の真実に迫る

ID 10455 2020.11 大野文雄

はじめに

私は定年を機に倭人伝の解説を楽しんでおり早や10年が過ぎた。その間、2年前に『邪馬壹国ここにあり』を自費出版したが、少し慌てて書いてしまった。その後、三国志を読み返すうちに新たな発見があり、倭人伝の道筋は実在したもので「短里」、邪馬壹国は九州の筑後川と宝満川に囲まれた朝倉を含む地との思いがさらに深まった。本稿は前著を補強し倭人伝の真実に迫ろうとするものである。

## 1. 陳寿の仕掛け

筑摩書房の『正史三国志』の解説には大略、「陳寿は魏を継承した西晋に仕えたので、建前として魏を正統王朝とした。それゆえに、後世、蜀正統論者からいわれない批判や非難を浴びるはめになった。しかし、『蜀志』をよく読めば限定された条件のもとで自らの母国たる蜀を称揚せんとする、歴史家陳寿の『仕掛け』が至る所に見いだされる」とある。例えば、曹操、劉備、孫権の死に用いた漢字、「崩」「殂」「薨」が挙げられ、孫権の「薨」は臣下に対するもので曹操と劉備は同格である。陳寿は漢字一文字にも、その反骨心や言外の暗示を示す「仕掛け」を潜ませている。

倭人伝にも「短里」に関して「陳寿の仕掛け」があるのでは？と探すと、倭人伝だけではなく魏志全体、特に景初や正始年代の記述に仕掛けがあり、「短里」は曹爽の権謀で使用され、卑弥呼もそこに絡んでいた。

以下、これらの仕掛けを意識しながら、倭人伝の道筋や「短里」について記す。

## 2. 道筋解説にあたっての留意事項

邪馬壹国へ至る道筋解説の留意点を示す。

比定した各国は、帯方郡＝沙里院、狗邪韓国＝金海、対海国＝対馬、一大国＝壱岐、末盧国＝唐津平野、伊都国＝前原（糸島平野）、奴国＝早良平野、不弥国＝福岡城址、投馬国＝福岡平野、邪馬壹国＝両筑平野（私の呼称）である。尚、前著では狗邪韓国＝釜山としたが今回、航路の観点から金海に変更した。

●倭人伝は紹熙本を参照。他の原文はネットの「三国志全文検索」を参照した。

●里程にはオリジナルがあり、陳寿が創ったものではない。

『三国志』と同時代作と云われる『魏略』にも同様の里程記事がある。

●倭人伝の里程は「短里（77m／里）」。

谷本茂氏が『周髀算経』の「里」が77m／里の短里であることを数学的に証明された。従って、古代中国に短里が存在したことは事実であり、倭人伝に短里が使用されても不思議ではない。倭人伝の道筋が短里によって現在の地図で再現できれば、その道筋は短里であり実在した道筋であったと、言ってよいだろう。

また、里程は陳寿が創ったものではないので、オリジナルで短里が使われていたことになる。では、なぜ短里だったのか？については7節で説明する。

●陳寿は3つの里程オリジナルを参照し、つなぎ合わせて書いた。

一つは帯方から伊都国まで、次は伊都国から邪馬壹国まで、次は船で帯方から投

馬国まで直行するルート。また、「里数」と「日数」が同時に書かれていないのは、倭人伝の短里が簡単にわかると陳寿の首が飛ぶからで、陳寿の苦心の作と見られる。

- 倭人伝の里程には軍事情報の側面もある。

魏志烏丸鮮卑伝の序文に「故に、漢末、魏初以来を挙げて四夷の変に備える」という陳寿の言葉があり、軍事情報の側面がある。

- 「邪馬壹国」が正しい国名で「邪馬臺（台）国」ではない。

「壹」は「壺の中に気が立ち込めている」状態を表す字。陳寿は「卑弥呼の靈気が立ち込めた国」と示したのである。倭人伝には「壹与」の「壹」と「臺に詣り」の「臺」がわずか一行の間で書かれている。これは、「壹」と「臺」の字体が異なることを示した陳寿の仕掛けである。「臺」が「壹」に誤写されたという説には説得力がない。また、「会稽東冶」が正しく、「東冶」ではない。

- 方向は出発する方向で、次の国が在る方向とは限らない。

対馬から壱岐へ「又南渡一海・・至一大国」とあるが、壱岐は対馬の東南で南ではない。これは、「北東に流れる対馬海流に逆らって南に船を進める」という諸説に賛同する。

- 奴国は道筋外（「行くべからず」と考える）。

倭人伝の「東南至奴国」と「東行至不弥国」を比較すると、奴国には「行」がない。奴国には「行くべからず」で道筋外。奴国の「至」は単に東南にあるという意。従って伊都国の国境で東南の奴国と東の不弥国へ向かう分かれ道（分岐点）があったと考える。この「道筋外」は古田武彦氏の説に賛同したもの。

- 「水行 20 日」は帯方から投馬国へ船で直行する道筋。

倭人伝が軍事情報も意識していると思えば、末盧国から上陸して行軍するよりも投馬国まで船で楽に行く道筋を示した、と考えるのが自然。また、奥野正男氏の「郡より倭に至るには」が前段の狗邪韓国他と後段の「投馬国、邪馬壹国」へかかっているという説に賛同する。

- 「水行十日、陸行一月」は帯方郡から邪馬壹国入口までの全移動日数。

帯方から狗邪韓国までは水陸併用。ここを全水行とすると陸行一月（30日）が消化できないし、全移動距離、万二千余里を大きく超えてしまう。

- 不弥国は投馬国の北、投馬国は不弥国の南で邪馬壹国の北である。

諸説の多くが、この課題を無視するか解決できていない。この課題を解決する道筋を探すことがポイント。

- 「その余の旁国」21国は「邪馬壹国の北ではない場所」である

「女王国以北は戸数、道里の略載可。旁国は遠絶にして詳にすること不可」とある。

投馬国は戸数、道里の記載があり、「女王国の北」である。

### 3. 邪馬壹国へ至る道筋

以上の留意点を念頭に、倭人伝の道筋を信じて辿る。

#### 3.1 帯方郡から狗邪韓国

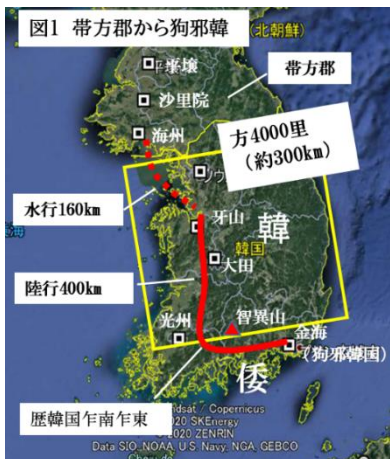
●「郡より倭に至るには、海岸に循（従）いて水行し、韓国を歴（すぎ）て乍南乍東して其の北岸狗邪韓国に到る、七千余里」。

郡とは帯方郡であり、平壤の南の沙里院付近、狗邪韓国は金海付近とした。

図1のように、帯方郡の郡境、海州港から出航し韓国の牙山で上陸。そこから、陸行して狗邪韓国の金海に到る道筋を想定した。

### <水陸併用で行く>

帯方郡から船で狗邪韓国まで全水行という説もあるが、これでは邪馬壹国までの全



陸行日数「一月（30日）」がクリアできない。

辞書を見ると「歴」には「ここを通り過ぎる」という意がある。従って、「韓国を通り過ぎて」であり、船上から韓国を眺めて行ったのではなく、韓国内を陸行したということである。

### <移動距離>

水行は海州から牙山、160km、2000 短里。陸行は牙山から金海、400km、5000 短里。

計 7000 短里で倭人伝と整合する。

### <水行日数> 2日。

海州から船で 160km、2日（80km/日）とした。魏志鍾会伝に黄河を船で長安から孟津まで 400km、5日、とあり 80km/日は可能。また、高木彬光氏の『邪馬台国の秘密』に、秀吉軍の船が対馬から釜山まで約 6 時間で渡ったという記述もあり、10km/時間くらいは出ただろう。尚、呉志丁奉伝に当時、帆があったことが認められる。

### <陸行日数> 22日。

全陸行日数 30 日のうち 22 日をここで消費するとした。最初の魏使は 240 年、当時の韓は魏に平定されていたとはいえ、安全の為に武具を身にまとして山あり谷ありの道を歩いたとする。18km/日は妥当であろう。

### <歴韓国、乍南乍東（韓国を通り過ぎて、たちまち南し、たちまち東する）>

魏志韓伝に「韓の地は方可 4000 里」とある。図1のように一辺約 300km の正方形で韓の地は囲める。従って「4000 里」が短里とわかり、この図から「乍南乍東」の意味がはっきりする。つまり、魏使は智異山（1915m）を迂回し、光州あたりで韓と倭の境を南に越えて、すぐに東の金海に向かったのである。

### <狗邪韓国は倭の領域>

当時、朝鮮半島に倭の領域があった。魏志韓伝に「韓在帯方之南、東西以海為限、南與（与）倭接」とあり、韓の南は倭と接していたと陳寿は記している。「韓を通り過ぎて」狗邪韓国に行くのだから、この狗邪韓国は韓ではない。つまり、狗邪韓国は倭の領域だったのである。狗邪韓国が倭人伝にある「今使譯所通三十国」の一つか？というのも議論があるところ。それは「女王国以北は戸数、道里の略載可」に対して「七千余里」の記載はあるが「戸数」がないことである。私は、「道里」があるので狗邪韓国は邪馬壹国連合三十国に含まれると考えている。

では、なぜ「戸数」がないのだろうか。上記の「南与倭接」から考える。「与」は「共に入り乱れ」の意を含むようである。魏志鄧艾伝に「東接呉会」がある。これに

は「与」がない。これは、「蜀を滅ぼしてその住民はことごとく魏に服属した。今まで蜀の東、呉との境界は蜀人と呉人が入り乱れていたが、今、はっきりと境界が区分されて接している」という意である。すると「与」がある「南与倭接」は「韓と倭の住民が入り乱れて接している」と解釈できる。つまり、倭と韓の家屋を区別することができないので戸数が書けなかった、と理解すればよいのではないだろうか。

### 3.2 狗邪韓国から対海国、一大国、末盧国へ

ここは、ほぼ通説通り。倭人伝の里程に合わせてルートを考えて。

- 「始めて一海を渡る千余里、対海国に至る。方可四百余里」
- 「又南一海を渡る千余里・・一大国に至る。方可三百里」
- 「又一海を渡る千余里、末盧国に至る」

図2に狗邪韓国の金海から出発するルートを示した。一大国のところで「又南」とあるので、狗邪韓国から対海国へも方向は「南」である。図2を見れば、両国とも出発地から見て「南」ではなく「東南」方向に在る。従って、この方向は出発する時の方向であり、対馬海流によって北東に流されないために船首を「南」に向けて進むことを示している。



#### <方 400 里と方 300 里>

対海国（対馬）は「方 400 里」と示されている。対馬は浅茅湾を差し引くと 64 x 32km の長方形に近く、64km を半分して二つを合わせると 32 x 32km の正方形となり「方 32km」、「方 416 短里」となって「短里」である。

また、一大国（壱岐）は少し小さいが、周囲の島々も領域とすれば「方 300 短里」といえる。

さらにこの「方」の記述は「島巡り読法」として

知られている。正方形の上辺中央から下辺中央まで半周する距離が対馬と壱岐の移動を表している。

従って、対馬の移動は 800 短里 = 64km、壱岐は 600 短里 = 48km ほどとなる。厳密に合わせる必要はないが、前著を少し変更して概ねこの里程に合わせたルートとした。

#### <移動距離と日数>

- ★金海から対馬の三根湾 水行 80km、1000 短里、1 日
- ★三根湾から豆酸 水行 64km、800 短里、1 日
- ★豆酸から壱岐の勝本 水行 65km 840 短里、1 日
- ★勝本から郷ノ浦 水行 43km 560 短里、3 日
- ★郷ノ浦から唐津 水行 60km、780 短里、1 日

金海から航海をミスって北東に流されると漂流する恐れがある。そこで対馬中央部の三根湾を目指すことにした。また、壱岐の移動に 3 日費やしたが、これは「方 300 里」に合わせるために島の西側ルートとしたからである。魏使は勝本から湯本湾に入りカラカミ遺跡の鉄を視察した可能性がある。次いで偵察を兼ねて沿岸航法で半城湾から長島を巡って郷ノ浦に入った、とする。

また、東ルートで原ノ辻から印通寺も考えられるが、次の末盧国への距離が短すぎるので、郷ノ浦経由とした。さらに、末盧国は呼子上陸も考えられるが、これでは渡海距離が短いので唐津とした。

さて、末盧国では「草木茂盛し行くに前人を見ず」と道の悪さを記している。これは、「ここで上陸して行軍すると大変で、奇襲を受ける可能性がある。ここは上陸すべき所ではない」と暗示している。

### 3.3 末盧国から伊都国

#### ●「東南陸行五百里、伊都国に到る」

伊都国は糸島平野が通説で、図3のように前原付近に比定した。唐津から前原に陸行するが、前原は唐津の北東である。そこで「東南」が問題にされることがある。

これは先述の「出発する方向」と見れば解決する。当時、唐津から海岸沿いの道はなかった。従って図3のように唐津から東南に出て鏡山を迂回し山越えをして前原に向かう。ここも「草木茂盛・・・」の道であったと容易に想像できる。

#### <移動距離と日数>

唐津から前原まで40km（500短里）。日数は山越えを見て3日。

### 3.4 伊都国から先の国々（奴、不弥、投馬、邪馬壹国）

#### ●「東南奴国に至る、百里」

#### ●「東行不弥国に至る、百里」

#### ●「南投馬国に至る、水行20日」

#### ●「南邪馬壹国に至る。女王の都する所、水行10日、陸行30日」

伊都国まではほぼ通説になっているが、ここから先が迷走している。それは倭人伝の「しぼり」、つまり「投馬国は不弥国の南、邪馬壹国は投馬国の南」の課題をおざなりにしているからではないだろうか。私は、この「しぼり」で諸説の可否を判定している。本項では、この課題を解決するルートを提起し検証する。

『魏略』には伊都国までの里程しかない。従って、ここから先は別のオリジナルを陳寿は参照したと思われる。それは陸行して邪馬壹国を目指すものと、帯方郡から船で直接投馬国に行くルートの二つである。

図3に邪馬壹国の入口、水城までのルートを示した。また図4には国土地理院の現在の立体図をもとに私が想定した、当時の博多湾の海岸線と不弥国の位置を示した。



比定した国々は図3のように北部九州の各平野に立地し、邪馬壹国は宝満川と筑後川に囲まれた地である。更にその南西に筑後平野と佐賀平野があり、21の傍国はこの場所に比定した。有明海の東に第2の奴国があり、この南が狗奴国と考えている。

### < 奴国 >

先ず、伊都国の前原から東へ8km、国境にある分岐点へ行く。ここに東南の奴国と東の不弥国へ向かう「分かれ道」があったと推察している。ここは高祖山から長垂山に続く稜線上の峠。ここを東南に出て8kmほど行くと早良平野の奥地、奴国の首長が居たであろう場所に出る。奴国は通説で「な国」と呼ばれるが「の国」だと考えている。早良平野には野方や野芥と「の」にちなむ地名がある。

さて、「留意事項」で説明したようにこの分かれ道で奴国への道はとらず、不弥国へ向かう。なぜ、だろうか。

それは、有事の際に上陸した魏軍が奴国へ向かうと図のように山間の袋小路に入り、倭軍に囲まれて全滅する恐れがあるからである。従って陳寿は「奴国へ行くべからず」の意を込めて「東南奴国」と「行」の字を意図的に書かなかった、と考える。

このように説明すると前原から分岐点までの里程が書かれていないことに疑問が湧くはずである。私も悩んだが、帯方郡からの出発点は郡境の海州港であった。つまり、伊都国からの里程を記した別のオリジナルも伊都国の国境、分岐点を出発点にしていたと考えれば腑に落ちる。

### < 不弥国 >

分岐点から東へ8km（100短里）の不弥国に向かう。「投馬国は不弥国の南」を解決するために見つけたのがこの福岡城址である。ここには7世紀の海外迎賓館だった鴻臚館もあった。図4に当時の想定海岸線を白の破線で示したが、ここから次の福岡平野に出ようとすれば、東の海岸線を「南」に歩くことになり、これが「南至投馬

国」である。この場所は一見狭く見えるが福岡ドームもあり 1km 四方の広さで不弥国の千家は収容できただろう。ちなみに奈良の纏向遺跡は 1.5 x 2km ほど。

不弥国は投馬国に入港する交易船の帆を兵たちが見て監視する「帆見の国」だったのではないだろうか。

交易船の監視という目で見ると、不弥国は西新町遺跡周辺の半島部も領域だった可能性がある。

### <投馬国>

不弥国の東海岸に沿って南に歩いて出ると投馬国である。魏が攻めるとしたらどのようなルートだろうと考えた時に、蒙古襲来の博多湾が思い浮かび「水行 20 日」がひらめいた。投馬国は福岡平野である。ここだったら 5 万戸の人口を擁するに十分な広さであろう。

陳寿は 3 番目のオリジナルからこのルートを巧みに別途挿入し、末盧国よりも投馬国の博多へ船で行く方が効率的で楽であり、「水行 20 日」と示した。

魏志鄧艾伝に「彼以船行、吾以陸軍、劳逸不同」とあり「敵は船で来て、吾が軍は陸地を行軍してきたのだから、その苦労は同じではない」という一文がある。苦労をするのは船頭たちで魏使や兵たちは寝転がっておればよいので、船での移動は大した苦労がないということであろう。

帯方から博多まで約 1000km で船の速度を 80km/日とすると 12 日くらいであり、途中での補給など考えれば 20 日は妥当なところである。

さて、福岡平野には比恵那珂や須玖岡本など弥生の有力遺跡があり、勾玉や日本有数のガラス工房跡が出土している。山陰から日本海ルートで運ばれた多くの玉材料や大陸からのガラス材料がこの博多港で荷揚げされたことだろう。この玉（たま）が投馬（たま）の語源で「玉の国」と呼ばれていたと考えている。

### <邪馬壹国>

投馬国を南に出ると邪馬壹国である。図 3 の大宰府の北に水城がある。ここは 7 世紀に博多湾側からの侵入を防ぐ目的で造られた水城があった。幅は 1.2km ほどだが、当時はもっと狭い谷間で投馬国と邪馬壹国との国境だっただろう。

「国境の狭い谷間を南に抜けると邪馬壹国だった」の情景が浮かんでくる。この先に山家（やまえ）という地名がある。「卑弥呼はどこ？」と聞かれた時に倭人は「あの谷間の向こうの山家の方に居る」と答えたのではないだろうか。この「やまえ」もしくは「やまいえ」を中国人は「ヤマイツ」と聞いたと思っている。中国語の「一」は「iet」と発音する。つまり、中国人は「邪馬一」と聞き、その「一」を陳寿が卑弥呼の「靈力」から「一」の旧字「壹」に変えて意味を持たせたと考えている。

邪馬壹国は 7 万戸なので投馬国の 5 万戸よりも広い領域だっただろうから、自然の大環濠となる筑後川と宝満川に囲まれた地域が考えられる。私は、この地域を便宜上、両筑平野と呼ぶ。夜須遺跡群、平塚川添遺跡など弥生の一大集落群がある場所で安本美典氏が発掘遺物等に対する統計解析によって邪馬台国と提唱されている朝倉地域とも一致する。

### <平原王墓と山家宝満宮>

さて、卑弥呼の宮殿がどこにあったのか？であるが、特定することは現状難しい。私は、山家のあたりに居たのではないかと考えているが、このあたりに有力な遺跡がない。ただ、卑弥呼が占いをしていた神殿と弟が大宰府や夜須あたりで政務をしていた宮殿とは別と考えれば山家あたりのひっそりとした場所でもよいかな、と考えている。そこで、地図を見ていると面白いことに気がついた。

平原王墓の被葬者は卑弥呼という説もあり私もそのように思っている。その棺は、東の日向峠から昇る朝日に向いている。さらに日向峠の東を見ると、そこに山家宝満宮があった。つまり山家宝満宮と平原王墓は日向峠を挟んで直線で結ばれている。

ところが、この宝満宮は1521年の創建である。当時の創建者が1200年以上も前の平原王墓の位置を知る由もなかっただろうし、偶然に直線上になったとも思えない。

創建当時は忘れられていたが、この宝満宮の場所には何かあったのではないか、それは卑弥呼の神殿であり、卑弥呼は太陽が沈むがごとくに西の平原に埋葬されたのではないか、などと想像している次第である。

### 3.5 帯方郡から邪馬壹国へ至る道筋の検証

ここまで帯方郡から邪馬壹国へ至る道筋再現を目的に一本の道として結んできた。その中で伊都国や投馬国などの国内を移動する道も再現され、倭人伝に隠れていた里程も明らかとなった。その道筋が倭人伝の記述と整合するか否かを検証したのが表1である。結果は倭人伝の記述とよく合っており、この道筋は再現できたと考える。

従って、倭人伝の道筋は虚構ではなく実在したものであり、その「里」は短里であったことが実証できたとと言えるだろう。

表1 倭人伝の道筋再現の検証（奴国は道筋外で除外）

ルート			再現距離		倭人伝 記載の里	再現移動日数	
目的地	出発	到着	km	短里		水行	陸行
帯方郡から 狗邪韓国へ	海州	牙山	160	2080	7000	2	22
	牙山	金海	400	5190			
対海国へ	金海	三根	80	1000	1000	1	
	三根	豆酸	64	830	方400里	1	
一大国へ	豆酸	勝本	65	840	1000	1	
	勝本	郷ノ浦	43	560	方300里	3	
末盧国へ	郷ノ浦	唐津	60	780	1000	1	
伊都国へ	唐津	前原	40	520	500	山越	3
	前原	分岐点	8	100	なし		
不弥国へ	分岐点	福岡城	8	100	100	川越	2
投馬国へ	福岡城	須玖	8	100	なし		
邪馬壹国へ	須玖	水城	4	50	なし		1
合計			940	(12200)	10600	9	28

- ・倭人伝の全移動距離は「万二千余里」、日数は「水行十日、陸行一月（30日）」  
記載距離は奴国を除いて10600里、不足分は方400里と方300里に隠されている  
さらに、「記載なし」の距離は再現した道筋を地図で測定
- ・再現結果は距離12200短里、水行9日、陸行28日とよく合っている
- ・尚、短里は77m/里とし、940kmから12200里とした

## 4. 会稽東治



邪馬壹国の領域が明確になったので、次は「会稽東冶」の場所を検証する。

- 「郡より女王国に至る万二千余里・・其の道里を計るに当に会稽東冶の東に在る」  
道里を計算して導きだした女王国の場所は会稽東冶の東だったと陳寿は記す。  
どのように道里を計ったのかは後述するが、当時の知識人たちが倭人伝を読めば女王国の場所が想像できるように陳寿は書いたはずである。陳寿は会稽東冶の前に「夏后少康の子、会稽に封ぜられ・・」と書き会稽を印象づけた。「夏后少康の子」とは会稽に封じられた越（BC600～BC306）の祖となった人で、その首都は会稽（今の紹興市）であった。従って、この「会稽東冶」は呉志呂岱伝（252年以前の記述）の、「会稽郡東冶県」（図5）とは違いますよ、と言っているのである。尚、会稽郡東冶県は『三国志』が書かれる以前の260年に建安郡東冶県に変わっている（呉志孫休伝）。

それから150年後の范曄は、うかつにも「会稽東冶」と『後漢書』に書いてしまったが、『三国志』と同時代の西晋の読者は「夏后少康の子」を見ているので、建安郡に変わった「会稽東冶」を思い浮かべることはまず、無かつたろう。

では、「東冶」とはなんだろうか。それは「魏が治めていた東側」という意味である。中国の地図を眺めると長江の北側に大別山脈が南北に連なり魏の領域を東西に分けている。この東側の意味で、魏志には「東征」の語がしばしば現れる。従って「会稽東冶」とは「魏が治めていた東側で会稽の近く」の意となる。会稽は呉の領域で、このあたりの魏と呉の境界は魏の塗州の南端、長江河口の北70kmほどのところ。このあたりから東を見ると当に女王国のあたりとなる。

#### 4.1 道里を計る

陳寿は、その計算方法を倭人伝にちゃんと書いている。それは、例の「方」を使った表現である。「島巡り読法」では正方形の半周だったが、この場合はそのタテの一辺を用いている。そして『魏略』にはない対海国の「方四百里」を倭人伝にわざわざ書き加え、図5の「陳寿の道里図」を描いて女王国の位置を計算で割り出した。

図5 陳寿の道里図と会稽東冶



陳寿は邪馬壹国がある倭地（九州）を「島」と捉え、その入口を末盧国として道里図を作り、帶方郡の海州から末路国の唐津まで7700里とおおまかに計算した。

海州の西が中国本土のどの位置になるかわかれば末盧国の西が中国のどの位置になるかわかる。グーグルアースで見ると海州は北緯 38 度あたり。その中国の東海岸に南皮県がある。倭人伝は「倭人帯方の東南大海の中に在り」と記している。従って、南皮から東南方向に 7700 里行った場所が末盧国の唐津になるはずである。

短里（77m／里）とすれば 593km で現在の中国塩城市の少し北、北緯 32 度 20 分あたりとなる。そこは、魏が治めていた東側で会稽に近い場所であった。そこで陳寿は「会稽東治」と表記したのである。これを長里（434m／里）とすると 3340km でフィリピンの東海上となって話にならない。

さて、九州でこの北緯 32 度 20 分にある場所を見ると、朝倉市の少し南、両筑平野でドンピシャであった。ただ、実際には唐津になるはずで南にずれているが、陳寿も厳密に図面を引いたわけではなく、だいたいこんなものと計算したのだろう。1700 年以上も前の話とすれば上出来である。

尚、図 5 の地図は中国歴史地図集（中国地図出版社）の三国時期であるが、中国の地図でも帯方郡は平壤の南、沙里院付近となっている。

### < 陳寿の仕掛け、短里 >

さて、倭人伝の短里が実証できたが、韓の「方 4000 里」や対馬の「方 400 里」が短里であることは現在の地図からわかることで、三国志当時の読者がわかったかといえ、そうは言えないだろう。後述するように、陳寿は倭人伝の里程が短里であることを隠した。しかしながら、短里であることを伝えたかった。そこで、会稽東治で「短里」を暗示した。当時の読者が会稽東治を「魏が治めていた会稽の近く」と理解し、「方」による陳寿の計算方法に気がつけば、「短里」とわかるように仕掛けたのである。「道里を計る」は「考えて下され！」という陳寿のメッセージでもあった。

## 5. その余の旁国

21 国もあるので詳細は省略するが、図 3 の筑後平野や佐賀平野に表 2 の国々が分布していたと考える。

倭人伝の国名は倭人語を魏使が聞いて漢字表記した中国製倭語。当時の倭語は縄文語をうけついで「ズーズー弁」に近いものであった（『縄文語の発見』小泉保）。

その倭語の「なにぬねの」を魏使は全部「奴」で聞いたと推察する。

尚、「好古都（ククツツ＝かぐつち）」と読んだ。「かぐつち」は記紀の火の神であるが、青銅器製造に関係すると想像し土生遺跡を考えた。ここで何か特殊な「かぐつち」と呼ばれる道具や土があったのではないだろうか。

また、旁国にも「奴国」がある。同じ「奴国」でも倭人の発音は早良平野が「野方」、狗奴国近くは「野志（今は濃施）」と違っていただろうから、「奴国」が二つあっても不自然ではない。

表 2 旁国の比定

国名	比定地	備考
斯馬	佐賀県杵島郡	きしま⇒シマ
巳百支	八女市岩崎遺跡	いはさき⇒いひゃさき⇒イヒャキ
伊邪	日田市石井	いはい⇒いひゃい⇒イヤ

郡支	久留米市以真恵の旧江口村	えぐち⇒えぐんち⇒グンキ
弥奴	佐賀県吉野ヶ里	三根⇒ミノ
好古都	佐賀県三日月町 土生遺跡	かぐつち⇒カクツ
不呼	佐賀県福母	ふくも⇒ほこも⇒フコ
姐奴	佐賀県柳川市	やながわ⇒やな⇒シャノ
対蘇	佐賀県鳥栖市	とす⇒トス
蘇奴	佐賀県基山町園部	そのべ⇒ソノ
呼邑	福岡県久留米市高良	こうら⇒コオ
華奴蘇奴	佐賀県みやき町 東尾遺跡	鉄砂＝かねすな⇒カノスノ
鬼	佐賀市巨勢	こせ⇒くわせ⇒クワ
為吾	佐賀県小郡市	おごおり⇒ウオゴ
鬼奴	佐賀市嘉納	かのう⇒クワノ
邪馬	福岡県みやま市山門	やまと⇒ヤマ
躬臣	佐賀市大和町久池井 惣座遺跡	くちい⇒くちん⇒クシン
巴利	福岡県三潴町原田	はるだ⇒ハリ
支惟	福岡県筑紫野市 旧基肄郡	きい⇒キイ
烏奴	福岡県久留米市安武町	筑後川流域で烏がいた沼⇒ウヌ
奴	大牟田市の北、JR 吉野駅付近	昔、野志の地名があり の⇒ノ

### < 参問倭地、周旋可五千余里 >

多少強引に比定した国もあるが、地形から見て旁国はこの場所の可能性が高く、女王国の北ではない場所に比定できている。

倭地とは図3の九州本土の邪馬壹国がある地と考え、末盧国の唐津から出発し海岸に沿って投馬国の北東、古賀市へ行き、そこから伊邪国である日田市へ向かい筑後川の東岸から有明海岸を巡り筑後川西岸の国々を巡って唐津に戻ると約400km、短里で5000余里となり、倭人伝の記述と合う。

また、「女王国の東、海を渡る千余里、復国有り、皆倭種。又朱儒国有り、その南に在り、身長三、四尺。女王を去る、四千里」がある。

これは、博多から玄界灘を東に100km（千余短里）行くと下関あたりで本州である。そこには、山陰、吉備、など別の倭種の国々があった。さらにその南には四国がある。

博多から下関を経て豊後水道を230km（三千短里）ほど行くと高知県の宿毛市や足摺岬あたりとなる。朱儒国はこのあたりで、女王国から四千里となる。

このように、これも「短里」で説明ができる。実際に魏使が実地調査をしなくても、投馬国に集まった商人たちの各地情報（水行や陸行日数）から、距離が推定できただろう。これが、倭人伝に「里数」と「日数」が同時に書かれていない理由である。

例えば、「東南陸行500里、3日、到伊都国」などと書けば70km/日は非常識なので、「短里」とすぐにわかってしまう。陳寿は「里数」と「日数」を巧みに織り交ぜて「短里」をばかしたのである。

## 6. 倭人伝の短里を考える

倭人伝の短里について、「短里の存在」そのものを否定する人もいる。しかしながら古代中国に短里が存在していたことは谷本茂氏によって証明され、動かぬ事実である。また、倭人伝の道筋が短里によって再現できたことから、倭人伝は「短里」で書かれたことも証明された。とはいえ、何か煮え切らない。それは、突然に出現した倭人伝の短里を誰が、何時、どのような背景で使ったのか、という問題である。

この問題に対して前著では「なんとなく」という感じで書いたので、今回、魏志で記された「距離の里」を全て調べた。その106例の多くは2点間の距離がなく長短の判定不可のものが多かったが、推定も含めて距離がわかったものを検討した結果、以下のことがわかった。

- 明帝による237年の改暦は短里に寄与しているが、魏の公式な里制度となったか否かは「四千里征伐」の解釈や公孫軍の圍塹「20余里」にかかっている。
- 短里は曹爽によるもので、オリジナル記録を曹爽が短里で作らせた。  
これは曹爽と司馬懿との権力争いに関係しており7節で説明する。
- 短里は正始年間(240~249)で使われ、曹爽誅殺(249年)後は不明。  
魏志本伝の正始年間の記事は長里があいまいな表現で、この間に短里が使われたことを暗示する陳寿の仕掛けと見られる。  
曹爽誅殺後は263年の鄧艾伝にある「劍閣の西百里、成都から三百余里の地点」が短里か否かにかかっている。
- 西晋の公式里制が短里だったか否かは不明  
西晋代の史書『吳録』に「鈍牛一日三百里」の記述があり、これは短里。  
当時、短里を知っていた知識人はいただろうが、公式里制かどうかは不明。
- 明帝の改暦以前は長里が主体で、その中に2例の短里がある。それは、よく知られていた東関の位置や天柱山の高さで、短里を知っている人は認識できる。  
以下、魏志の「里」を時系列に見ていく。

## 6.1 明帝の改暦以前の里

236年以前の「里」は66例あったが長短の区別ができたものは7例で長里が5例、短里が2例であった。これらは中国歴史地図集(三国西晋時期)に地名や河川名があり、そこから距離を測定した。尚、年代は出来事が生じた年代である。

### <長里の例>

- 201年(後漢代) 鄴-洹水 50里、鄴-陽平亭 17里(袁尚伝)
- 214年(後漢代) 長安と鄴は往復四千里(夏侯淵伝)  
夏侯淵が長安付近に居たとする。往復1200kmはあり長里である。
- 218年(後漢代) 代-桑乾 200余里(任城威王彰伝)
- 231年(魏代) 合肥新城は旧城の西30里(滿寵伝)

### <短里の例>

- 226年頃(魏代) 東関は豫州の南方、長江から400余里(賈逵伝)  
東関は巢湖の南、長江の北30km付近で短里である。
- 230年(魏代) 潜中有天柱山高峻二十余里道險狭歩径裁通(張遼伝)  
ネットで天柱山は1489.8m、短里で19.3里。「高峻二十余里」と区切って読め

ば天柱山の高さとなり短里である。

明帝の改暦（237年）以前は上記のように長短が混在している。魏（220～265）になって短里が2例あるが、最新の231年に長里があることから、この時期に短里が公式里制だったとは言えない。この2例は西晋代でもよく知られた場所や高さだったと思われ、当時の「短里」を知っていた知識人は短里と認識できただろう。これは、「短里が今後も出てくるかも」と示した「陳寿の仕掛け」と考えている。

## 6.2 景初年間（237～239年）の里

明帝が237年の3月を4月に改めて改暦を実施した。裴松之注には「いま魏は殷の礼を用いて周の制度を改変しているから・・・」と記されている。つまり、改暦によって里制度も殷や周のものが復活し、短里も復活したのではないか、というわけである。

この間の里程記事はわずか3例で「万里の彼方」という慣用句を除くと2例である。

### ●「四千里征伐」

遼東の公孫氏討伐の朝議で237年の末ごろ、つまり改暦後に明帝が言った言葉である。洛陽と遼東郡治の遼陽までの距離は1400km、後漢書では3600里とある。従って、長里であり明帝当時も3600里と認識されていただろう。ただ、うがった見方をすると、この明帝の「四千里」は実距離ではなく公孫淵を指した言葉にも思える。この「四千里」は四捨五入ではなく「九服の制」から公孫淵を卑下して「四千里野郎を征伐せよ」と言った可能性である。

「九服の制」とは王城の地を四方千里とし、その外の地域を五百里ごとに侯服、甸服、男服、采服、衛服、蛮服、夷服、鎮服、藩服の九地域に分ける。服は服従の意（『正史三国志』東夷伝脚注）。

王朝の勢力範囲を示す概念であるが、「四千里」は蛮夷の地となり、公孫淵を「蛮夷野郎！」と呼んだのではないだろうか。

とすれば、「四千里」は距離とはみなされないのが、改暦による短里復活説は可能性として残る。ただ、少し強引すぎる感があるので棚上げしておく。

### ●「圜塹二十余里」

公孫淵は司馬懿軍に備えて20余里の塹壕で囲って守らせた、というのだが、長里で9km、短里で1.5kmである。どのような場所に囲ったのかわからないので、これも保留としておく。

## 6.3 正始年間（240～249年）の里（短里の本命）

明帝没後に曹真の息子である曹爽が司馬懿を抑えて実権を握っていた期間である。「短里」は明帝の改暦で公式里制とはならなかったが、改暦論議の中で俎上に上り、「短里」が顕在化した可能性がある。それを利用したのが曹爽だと考えている。

この間の里程記事は26例で22例は東夷伝、そのうち13例が倭人伝であった。

倭人伝が短里であることはここまで見た通り。東夷伝も韓伝の「方四千里」が短里で、他の夫余伝なども先述の「与～接」に着目すれば隣国同士の境が密接していなくてよいので短里でよい。長里であれば「方二千里」の高句麗が日本海まではみ出し、沃沮の場所がなくなるのでおかしい具合となる。

さて本伝の記事が面白く、正始年間に短里であったと暗示する「陳寿の仕掛け」があった。本伝の4例中、1例は長短の判定不可で3例について見ることにする。

A 毋丘儉伝（245年）：「沃沮を過ぎて千余里、肅慎氏の南界に到達」

B 王昶伝：「正始年間、王昶は宛から襄陽まで三百余里と考えた。そこで上奏して新野に役所を置いた」。

C 孫礼伝（正始年間）：「爵隄は高唐の西南に在り、係争地は高唐の西北に在り、相去ること二十余里」。

Aは東夷伝と重なる。幽州刺史の毋丘儉に命じられた玄菟太守の王頎が高句麗王を追って肅慎の南界まで行った話である。肅慎の南界は日本海に面した中国とロシアの国境付近と見られ北沃沮の清津あたりから北に100kmほどのところ。短里である。

次のB、Cが面白い。

Bの「宛から襄陽まで三百余里」は長里である。ところが、王昶は頭の中で考えただけで口には出していない。そして上奏文のなかで距離について触れたのかどうかわからない仕組みとなっている。ここに「長里」を曖昧にした「陳寿の仕掛け」がみとれる。

Cは太傅司馬懿とあるので明帝没後の239年以降で、正始の中頃の可能性が高い。明帝が平原王となった220年頃に作られた地図をもとに孫礼が土地の境界争いを収めた話である。この時、曹爽は「地図を使うな」と命じ、司馬懿は「使ってもよい、それが道理だ」と言っている。地図を使った孫礼は曹爽に禁固処分にされた。220年頃の地図は「長里」で描かれていたはずである。

BとCを合わせて見ると、曹操が「短里」を使用させていたのではないか？と思わせるものであり、長里をはっきり言わなかった王昶は無事で、触れるとまずい長里に触れた孫礼は曹爽に罰せられたと陳寿は暗示している。

特に王昶の話は年月を特定できるはずだが、わざわざ「正始年間」と幅のある年代で書いている。つまり、曹爽が実権を握っていた正始年間は「短里」が使われていた、と陳寿は伝えようとしているのではないだろうか。

では、なぜ曹爽が短里を使わせたのかは、次の7節で説明する。

#### 6.4 嘉平元年（249年正月曹爽誅殺後）から魏滅亡（265年）まで

249年正月に司馬懿が曹爽を誅殺し嘉平に改元された。司馬懿は実権を握り西晋の祖となった。この間の「里」は11例だが2点間の距離がわかりそうなのは1例しかなかった。

A 「劍閣の西百里、成都から三百余里の地点に出る」（263年 魏志鄧艾伝）

中国歴史地図集で見ると劍閣の西100里の地点から成都まで直線で210km、480長里で実際の道は更に長くなるだろうから、300余長里では短かすぎる。

ここで気にかかるのが蜀志の次のB、Cの記事である。

B 「涪は成都から360里」（211年陳寿の記述 蜀志劉璋伝）

C 「涪から漢中まで1000里になんなんとす」（244年王平の言葉 蜀志王平伝）

涪は成都から漢中へ向かう途中の地名である。B、Cともに長里とすれば成都から涪を経由して漢中への距離は1360長里に近い。すると590kmほどになるはずだが、地図で成都と漢中の距離を測ると420kmほどで短かすぎる。

Cは蜀の王平の言葉で、陳寿が勝手にそれを変えることはできない。蜀は魏と関係

がないので王平は当時の長里を使い、Bは陳寿の記述で、陳寿が短里を使ったとすれば、成都から涪は360短里、涪から漢中は904長里で合計420kmと計算できて王平の言葉や地図と整合する。陳寿の「360里」は短里だったのではないだろうか。

ところで、中国歴史地図集の涪は今の綿陽に比定され、成都から105kmで短里ではなく長里であり、290m/里ほどになる。

蜀の長里が290m/里だったとすればB、Cの成都から漢中まで1360里は妥当となるが、逆に魏志のAは劍閣の西100里の地点から成都まで210kmなので距離は700里となって300余里との乖離度が更に大きくなる。

説明がややこしくなったが、要するに魏志Aが短里だったら正始から魏滅亡まで魏は「短里」を使っていたと言えるのだが、よくわからない、ということである。魏志と蜀志で「里」に関して何か辻褃があわない、という問題提起としておく。

## 6.5 西晋の「里」

西晋代の「里」について、私の知る限りでは『呉録』の「鈍牛は一日三百里」だけである。蜀志龐統伝の裴松之注にあるが、この三百里は短里の23kmが妥当。長里だと130kmとなって牛が1日で歩ける距離ではない。

『呉録』は西晋代に編まれた史書で、短里が公式里制ではなかったかもしれないが、

これによって少なくとも西晋の知識人は短里を知っていた、といえる。

ところで、米国のデビスカップという馬の長距離レースがNHKで放映されていた。これは160kmを24時間（一昼夜）以内で走破するものである。訓練された馬が出場するがトップは20時間くらいで完走し、馬は夜目も効くとのことであった。

少し脱線したが、蜀志に曹操が劉備を追って襄陽から当陽まで130kmほどの道のりを「一昼夜で三百里駆けた」がある。これは長里で当初は馬が一昼夜で130kmも走れるの？と疑問に思ったが、デビスカップを見たら、この記述はあり得る話で誇張でもなんでもないと納得した次第である。

## <『呉録』のオチ>

さて、「鈍牛一日三百里」にはオチがある。参照した『正史三国志』の底本は1959年の中華書局版である。ところが同局の1982年版では、この「三百里」が「五十

里」に改変されていると『邪馬壹国の歴史学』で指摘されていた。

50長里であれば23kmくらいで鈍牛が歩く距離として妥当である。この改変の詳細理由はよくわからないが、1982年当時の中国は「短里」の存在が念頭になかったのかもしれない。

倭人伝は短里を容認しないと解説できないと思うのだが、最近の中国歴史学での「短里」についてはどのようになっているのだろうか。

以上、いつ頃、誰がどのような理由で倭人伝の里程に短里を使ったのかを魏志の中で時系列に検討してきた。その結果、曹爽が司馬懿との権力争いの中で明帝の改暦時に顕在化した短里を利用して使い、使われた期間は曹爽が誅殺された249年までの正始年間だった、が今現在の結論である。

## 7. 曹爽の短里と司馬懿、卑弥呼

陳寿が書きたかったテーマの一つが「曹爽と司馬懿の権力争いと卑弥呼」だったのではないだろうか。諸説で司馬懿を称揚するために倭人伝で卑弥呼の朝貢を大きく見せた、というのがあるがこれは違うようである。ただ、西晋時代に卑弥呼の朝貢は司馬懿の功績となっていた可能性はある。

魏志本伝や倭人伝に散りばめられた記事を時系列に読むと卑弥呼の朝貢や短里は司馬懿ではなく曹爽の権謀術数によるものであったことがわかる。この真相をストレートに暴露すると陳寿の首は飛んだだろうが、歴史家陳寿としては真相を伝えたかった。陳寿は、その記事をあちこちに分散してわかりづらく書くことで西晋に対する反骨心を発揮したと考えられ、短里問題のわかりづらさもここに起因している。

表3に卑弥呼朝貢前後の出来事を時系列で示した。この表から卑弥呼の朝貢は景初2年だったことが理解でき、さらに曹爽が司馬懿を抑えるために巡らせた権謀術数が浮かび上がってくる。

### 7.1 卑弥呼の朝貢は景初2年である

既刊の書籍を見ると卑弥呼の朝貢は景初3年説が有力である。その理由は、魏と公孫淵との戦いの最中である景初2年6月に日本から韓半島を経て帯方郡に到達することは無理、というものである。しかし、韓の首長たちが公孫氏より強い魏になびいたとすれば、表3のように景初2年の4月には韓の地が平定され、公孫淵の息がかかった帯方太守を追い出し魏の劉頎が帯方太守の座に就いたことは十分に考えられる。

倭人伝には「帯方から邪馬壹国まで水行10日、陸行30日」とある。従って、魏と公孫淵の戦いや劉頎優位の情報を4月末に卑弥呼が得て、5月初旬に使者が出発すれば6月中旬には帯方郡に到着できる。この時に卑弥呼は「魏の勝利と公孫氏滅亡の呪詛をかけた」ことを使者に持たせただろう。この卑弥呼の情報はすぐさま洛陽の曹爽にもたらされたはずである。そして使者たちは洛陽まで行き、12月に「親魏倭王」に制詔された。



6月に到着した使者の朝貢儀式が、なぜ12月だったのか？については後述する。

表3 卑弥呼朝貢前後の年表（カッコ内は推理事項）

237年		
3月	景初元年4月	明帝の改暦（短里に変更された可能性あり）
238年（景初2）		
1月		司馬懿が遼東の公孫氏討伐に出征 （同時に帯方太守の劉頎らが韓平定のために密かに海を渡る）
	（4月）	（劉頎らが韓の地を平定し帯方に入る。 帯方太守劉頎は功績により「劉夏」の名を賜わる）
	末頃	（卑弥呼が公孫氏討伐戦の情報入手）
	（5月）	（魏の勝利を占った卑弥呼は朝貢使を帯方に派遣）
6月		司馬懿軍が遼東の長雨で停滞。魏朝はヤキモキ
	中旬	卑弥呼の使者が帯方に到着 （この時、卑弥呼の「魏の勝利と公孫氏滅亡の呪詛」を伝える）
8月	23日	司馬懿が公孫氏を滅ぼす
	（9月）	（公孫氏滅亡の情報を得た曹爽は、帯方に留めていた卑弥呼の使者を 洛陽に呼び寄せる指示を早馬で出す）
	（10月）	卑弥呼の使者が官吏に案内されて洛陽に向けて出発
11月		公孫氏討伐の論功行賞が記録される
	（下旬）	（卑弥呼の使者が洛陽に到着）
12月	8日	明帝が病に伏す
	初旬	卑弥呼朝貢の儀式が行われ、親魏倭王に制詔
	末	司馬懿が洛陽に帰還、明帝の遺言を曹爽とともに聞く
239年（景初3）		
1月		明帝没 幼帝芳が即位するも1年の喪に服す
2月		司馬懿を太傅にし曹爽が実質権力を握る
12月		改元 暦を夏暦に戻し正始元年とした
240年（正始元年）		魏使が帯方から邪馬壹国へ下賜品を運ぶ
243年		卑弥呼朝貢
247年		卑弥呼朝貢、狗奴国との戦いを報告 帯方から張政が来倭
	（248年）	卑弥呼没
249年（正始10）		司馬懿が曹爽を誅殺、西晋建国の基を作る
1月		曹爽誅殺後、嘉平元年に改元
251年（嘉平3）		司馬懿没

#### < 劉頎と劉夏 >

景初2年6月の帯方太守は劉頎から劉夏に変わっている。これは劉頎が韓平定の功績によって、より良い名である「夏」の名を賜って「劉夏」になったものと思われる。

魏志程昱伝の裴松之注『魏書』に程立が曹操によって「立」に「日」をつけて「昱」の名を賜り「程昱」になった話がある。

#### 7.2 曹爽の権謀術数

司馬懿が公孫淵を討伐して洛陽に帰還する12月末までの出来事が面白い。

討伐に出陣した司馬懿の成功を曹爽は願わなかった。公孫氏滅亡前に卑弥呼の「魏の勝利と公孫氏滅亡の呪詛」の情報が帯方から曹爽に届いたが、これは曹爽の意に沿わなかった。しかし、もしも司馬懿軍が勝利した際には卑弥呼の「呪詛」が使えると曹爽は考えた。つまり、公孫氏討伐は司馬懿ではなく、卑弥呼の「呪詛」の功績、と言える。そこで卑弥呼の使者を帯方に留め、様子を見た。

そして8月23日に司馬懿の公孫淵討伐の情報が早馬で9月中旬に洛陽の曹爽のもとに届いた。曹爽はがっかりしたが、ここで権謀術数を巡らせる。

それは、司馬懿の洛陽凱旋前に論功行賞を済ませ、司馬懿の晴れ舞台を消すこと。さらには卑弥呼の朝貢を曹爽の大きな功績とすることで、司馬懿の功績を目立たなくする作戦で、司馬懿凱旋前に朝貢儀式を行うことであった。

司馬懿は討伐前に「行くに百日、攻撃に百日、もどりに百日」と言っていた。従って、公孫淵討伐後の諸事を済ませて司馬懿が帰還するのは早くも12月末と曹爽は計算したのであろう。卑弥呼の使者は遅くとも12月初旬には洛陽に到着させる必要があり、道に迷って遅れることは許されない。そこで、曹爽は通常の朝貢使にはない待遇で役人に彼らを案内させたのである。

この道筋は帯方から海を200km渡り山東半島から洛陽まで800km、海路を入れて40余日で到着したであろう。使者たちが帯方を10月初旬に出発すれば11月末には洛陽に到着したはずである。尚、曹爽が使者を呼び寄せるための伝令は、9月中旬に洛陽を早馬で出て10日余り、9月末には帯方へ到着したと推察する。

そして、幸か不幸か12月8日に明帝が病に伏した。その名代として曹爽はその参謀たちが作った大仰な詔書を披露し朝貢儀式を盛大に実施。その中で、この朝貢は自分の功績で、朝廷の権力者は曹爽であることを司馬懿不在の中で見せつけた、という物語が見えてくる。

この権謀術数によって明帝亡き後、景初3年2月に曹爽は司馬懿を太傅という実質権力を削ぐ名誉職につけて自身が権力を握ったのである。

### 7.3 曹爽の短里

詔書には「汝の在る所、遠きを踰（こ）え」とある。曹爽やその参謀たちは、この時点で「短里」の使用を考えていたと思われる。それは、卑弥呼の使者から帯方までの水行や陸行の日数を聞くことで、およその距離がわかったからである。

その距離は長里で2000里ほどで大した距離ではなかった。そこで、明帝の改暦時に話題になった古の「短里」を参謀の誰かが思いついたのだろう。奇しくもその距離は短里で12000里であり、洛陽までは17000里とごまかすことができ、229年に西域から朝貢した大月氏国の距離に匹敵するものであった。大月氏国王、波調は「親魏大月氏王」に任じられており、それは曹爽の父、大將軍曹真の功績であった。

詔書で卑弥呼も「親魏倭王」とされている。曹爽たちが、曹真の功績を意識していたことは間違いないだろう。曹真の功績と等しく装うことで曹爽の権威と名声を高めようとしたのである。

従って倭人伝の「短里」はこの時に仕組まれたと考えられる。倭人伝の里程は魏使の実地検分によるものだが、曹爽はその里程を「短里」で作るように帯方郡に命令したのである。

### 7.4 卑弥呼に対する厚遇と絶大な霊力

卑弥呼の貧弱な貢物に対して魏はなぜあれほど豪華な下賜品を与えたのだろうか、それも卑弥呼個人にも、という疑問が諸説にある。前著では卑弥呼の「魏勝利の占い」と「公孫氏滅亡の呪詛」を魏朝が大喜びしたとしたが、曹爽と司馬懿の権力争いを見れば、それは早計で曹爽の作戦であったと考えを改めた。

曹爽は卑弥呼の靈力に魅せられて彼女を自陣営に取り込むために、あれほど豪華な下賜品や彼女自身にも「汝の好物」を贈ったのである。おそらく、朝貢儀式の際に、卑弥呼の占いや呪詛を披露したことであろう。靈能者卑弥呼を靈的な後ろ盾とすることで司馬懿の牽制をした。つまり、司馬懿が何か企むと卑弥呼の靈力によって災いをもたらされる、ということである。

司馬懿が卑弥呼なぞ恐れるものか！と考えるだろうが司馬懿は身に覚えがあった。それは、公孫淵討伐の最中、8月7日の夜に大流星が落下。8月23日に公孫淵が斬り殺されたのは、その大流星が落下した場所だったのである（公孫度伝）。

これを卑弥呼の絶大な靈力と呪詛の力と曹爽は感じ、洛陽帰還後に卑弥呼の占いや呪詛の話聞いた司馬懿にとっても軽く見過ごすことはできなかったのである。

その証拠に、卑弥呼が没し靈力が失われたその翌年に司馬懿は行動を起こし、249年の正月に曹爽を誅殺している。また司馬懿はその2年後の251年に没したので、もしかしたら卑弥呼の靈力は残っていたのかもしれない。

陳寿が伝えたかったのは、このような物語ではなかっただろうか。卑弥呼の朝貢が司馬懿の功績と言われているが、実は曹爽のものだった。

陳寿はこの真実を伝えたかったが、そう簡単にはわからないようにあちこちの「伝」に記事を分散させ、「短里」は曹爽の策略と暗示したのである。

この物語からは司馬懿は卑弥呼を忌み嫌っていたことになり、これが『晋書』から倭国の記事が消えた「謎の四世紀」の原因だったのかもしれない。

## 7.5 王頎に聞く

さて、倭人伝の里程オリジナルが曹爽の命令によって短里で作られたと考えたのだが、ではそれが短里だった、と陳寿はなぜわかったのだろうか。

東夷伝の序文に「肅慎の庭を踏み東に大海をのぞむ。長老説くに異面の人、日の出ずる所の近くにあり」と記されている。長老は誰に説いたのかと言えば、陳寿である。

この長老とは肅慎まで行った人である。それは245年に玄菟太守として高句麗王を追って肅慎まで行き、247年に帯方太守として卑弥呼の朝貢を受け、263年の蜀討滅の時には魏の天水太守として戦った王頎が考えられる。

王頎は「王頎伝」としては立てられていないが、魏志の中で三度も登場するので倭人伝や東夷伝の内容を陳寿がヒアリングした長老としてふさわしい。

陳寿は王頎からオリジナルの短里や曹爽に関する裏話などを聞き、魏志に一大物語を潜ませたのである。

## おわりに

前著では倭人伝の「短里」は確信していたが、それが使われた背景についてはあいまいだった。今回、その解明に挑戦し真実に近づくことができたと感じている。

里程の解説は必要十分ではないが、倭人伝の「しぼり」、つまり方向、距離、日数、各国の配置などすべて満たすことができたので一つの解が得られたと思っている。

ただ、曹爽の命令による短里の使用については、その命令が帯方郡だけか魏全体に及んだのかは定かでない。王昶と孫礼の話からすると魏全体に対してではなかった、

と考えたい。曹爽一派が邪馬壹国への距離を短里でごまかしていることを朝臣たちは気づいていたが、これを付度する風潮だったのではないだろうか。

この点を明らかにすることは今後の課題であるが、多くの史書に当たる必要があり、素人の手に余るものである。

ところで、東夷伝序文には何か陳寿の高揚感が感じられる。それは、呉志の徐福伝説と関係がありそうで、古代中国人は東方の海上に不老不死の国があると思っていた。

呉の孫権が230年に探索に行かせたが失敗（呉主伝）。ところが魏は240年に東方海上の島国（会稽東治の東）に行き、陳寿は歴史家として初めてそれを書いた。

その高揚感だったのではないだろうか。結果は、長寿の人はいるが卑弥呼も神仙ではなく「人」であった。だから「卑弥呼、以て死し・・・」と書いたのである。

また、東方の海上にあると信じられていた蓬莱などの3神山は「三壺」と呼ばれたそうである。陳寿の時代に「三壺」の呼び名が既にあったとすれば、この「壺」と邪馬壹国の「壹」と結び付けた可能性もある。

さて、表3で239年の明帝の喪中を除くと238年から卑弥呼の朝貢は4年ごとに行われている。これは魏に冊封され「九服の制」に入ったことを示している。

そこで注目すべきは平原王墓出土の超大型鏡である。この鏡には中国に類例がない「九重の円」模様が刻まれており、日本製ではないかと言われている。

しかしながら「九重の円」が「九服の制」を表しているとすれば、曹爽が卑弥呼に贈った魏鏡の可能性がある。

やはり「卑弥呼の鏡」では？と想像を更にふくらませているところである。

以上